

---

# 残念な使い魔

とげ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

残念な使い魔

### 【Nコード】

N1160S

### 【作者名】

とげ

### 【あらすじ】

オリ主がサイトの代わりに召喚されます。

作者が「やっべ、召喚されてえ。パンツ洗濯してえ。」とのことで、勢いで書いた小説です。ハイ。

チート能力をふんだんに使って、すごい厨二な作品にしたいと思っています。

処女作？なのでおかしな点があるかもしれませんが、それでも読んでくれれば、作者が鼻血を吹き出して喜びます。

## プロローグ（前書き）

今更だが書いた。後悔はしていない。  
初心者ですので、感想とかお願いします。

## ブローグ

「たっだいまー。」

返事は無い。今、俺が住むこの家には、ただいまーおかえりー。何てお決まりの流れは無いのだ。そう、あの日から……。

なーんてな。そんな、親が死んでから俺は一人暮らしなんだＺＥみたいな設定は無いぜ！

えっ？じゃあ何で返事が無いんだって？うち、共働きなんだよ。

「うつし、そんじゃあ飯の用意するか。」

パカッ。冷蔵庫を開けると、そこには異次元へと繋がる鏡のような物があった。

パタン。何事も無かったかのように、冷蔵庫を閉める。

うん、何かの見間違えだ。そうに違いない。そうとしか思えない。

パカッ。再び冷蔵庫を開ける。そこには異次元へと繋がる鏡のような物が……パタン。

パカッ。パタン。パカッ。パタン。パカ、パタン。パカッ、パタアアアアンツ！

うん……、何回見ても消えないや（；^ ^）

あっ！これ、夢なんだろ？そうじゃん、こんなの現実じゃありえないもんな。

「夢だ。これは夢だ。夢だったら何をして大丈夫だ。今、ここで少し体に衝撃を与えたら、俺は、五時限目の国語の授業中に、先生に注意されてみんなに笑われながらも、この訳わかめな夢から抜け出せるはずだ。」

そう言いながら俺は、近くに立ててあつた包丁を手にとった。

「夢よ覚めろおおおおおおおおお！！！」

そう言つと俺は、固く握った包丁で、左手首を思いつ切り、突き刺した。

( ; ^ ^ ) . . . . !

血がこれでもか！という程出ている。しかし、痛みが無い。と、言う事は？そう、これは夢だったのです。って．．．あれ？何だか目眩が．．．。

「深く刺し過ぎたか．．．。みんな、現実逃避はほどほどにな．．．  
．．．。」

視界が周りから黒くぼやけていく。あ、死んだかも。

「ねーねー起きてよお。はう。」

ん．．．？何だこのロリボイス。何か凄いロリ声の人が俺を起こそうとしてるな。ここは早く起きた方が良くかも。

．．．．．って、あれ？何で？えっ、アレってやつぱり夢だったの？いやいやいやいや。えっ？マジで？本当に夢だったの？

まあ、とりあえず起きた方が良くかも。よし、起きよう。うん。

( よっこいしょ．．．。 って、あれ！？喋れねえ！！！ )

「あっ、やっと起きた。」

「起きていきなりべらべらと煩い奴じゃのお。」

( えっ？俺喋ってないじゃん。何言ってるの？この爺さん。 )

「えっ？俺喋ってないじゃん。何言ってるの？この格好いいお爺様。」

( ! ? )

「 ? 」

おいおいおいおいおい。この爺さん、俺の考えてる事がわかってるっばいぞ！？しかも、ちよつと変えてやがる．．．！

しかし、このロリっ娘は何が起こってるか分かってなさそうだな。ってことは、分かっているのはこの爺さんだけか．．．。

あっ！そんなことよりここはどこなんだ！？俺は死んだんじゃなかったのか！？

「ああ、確かにお主は死んだ。そして、ここは死後の世界じゃ。つ

いでにわしにはお前の考えてる事がわかる。」

（マジかよ・・・。）

「お主、まだ死にたくないじゃろ？」

（あつたりまえだろ！俺は、まだ13年しか生きてねえんだぞ！）

「そう言うと思ったわい。お主、これが何かちゃんと分かっているな？」

爺さんは、そう言いニカツと笑うと、杖を小さく振り、目の前にあのゲートを出した。

（うん、どう見てもゼロ魔に出てくる、あのゲートだな。）

「わかつておるのなら良い。お主には、死んでほしくないからの。これを通して、ハルケギニアに使い魔として召喚してもらう。」

（わかった。あれ？死んでほしくなくてハルケギニアに送るんだったら、どうして生きてた頃にゲートが出てくるんだよ。）

「それは、お主に良い思いをしてもらおうと思ったからじゃ。お主がその作品が大好きじゃからの、作品の中に入ったら喜ぶと思っとな・・・。」

（そういう事か！ありがとう！じゃあ早速・・・。）

「まあ待て。焦るな。」

（まだ、何かあるのか？）

「お主、欲しい物はあるか？」

（あつ！そうか、結構用意とかあるもんな。あー、でも服・・・は、げつ！よく見たらかなり血が付いてるじゃん・・・ま、いつか。）

「うん？欲しい物は無いのか？何でも良いんじゃないぞ？」

（うーん。何でも、何でもか・・・あつ！じゃあ特殊能力付けてくれよ！あ・・・しかし、異端とかと思われないか・・・？あ、やっぱ、さっきの無し！魔法使えるようにしてくれ！）

「魔法だけでいいのか？わしは別にどっちも使える方が便利じゃと思うが・・・。」

（そうか、それもそうだな。うん。バレなければ良いだけだもんな。うん。そうだ、そうしよう。）

「それで良いんじゃない？」

（おう！良いぜ！もう準備万端だ！）

「よし！なら、今の状態を確認するぞ！順に言っていってくれ！」

（えーと。服は灰色の無地の長袖の上に黄色のパーカー。そして、色が落ちすぎて白くなったジーンズ。パンツは青いトランクス、靴下は白のショートだ。そして、いつのまにか履いていた、銀色の合成の皮を使ったオサレ靴だ。よし、杖を忘れてた！）

「それはもうこれで良いじゃろ。ほれ、それをくれてやる。」

爺さんはこっちに向けて30cm位の黒く艶のあるつるつるの杖を投げてきた。

（ありがとよ。んじゃ、そろそろ行くわ。）

「おお、もう行くのか。がんばるのじゃぞ。」

（おう！色々ありがとうな！）

そして、俺は、あのゲートに思いつ切り飛び込んだ。死んだ時とは違う、視界が突然、白く光った。

「・・・もう少しくらい可愛い曾孫といたかったのお。・・・死ぬなよ。拓人。」

「あたし、忘れられてる・・・。」

## プロローグ（後書き）

自分ではかなり書いたつもり。

伏線は貼られて・・・いる・・・のか？

読んでくれた方、ありがとうございます。

追記：誤字修正しました



## 第一話、のようなもの。（前書き）

頑張ったんだけど、テンプレっぽくなった。

## 第一話、のようなもの。

「あんた誰？」

あのゲートに飛び込んで、突然、声を掛けられた。

どうやら俺は本当に、ゼロ魔の世界に召喚され、今、目の前にいるルイズの使い魔になったらしい。

「俺は澄川拓人だ。よろしく。」

そう言い、俺は手を前に軽く出した。

「どこの平民？」

俺の前に出した手を、完全にスルーされてしまった。俺は、なぜだか少し恥ずかしい気持ちになったので、手を引っ込めた。

「ルイズ、サモン・サーヴァントで平民を呼び出してどうするの？」

何と答えようと考えていると、キュルケがそう言った。すると、ルイズ以外の全員が笑っている。あ、タバサも笑ってなかったわ。

てゆうか、みんなで困んで笑ってるとか、端から見たらいじめ現場としか思えないぞ。

「ちょ、ちよつと間違っただけよ！」

今、俺の目の前にいるルイズが、可愛い声で怒鳴った。こんな可愛い子の穿いたパンツを我が物に出来るなんて・・・！何て興奮するんだ！勃起が止まらねえ！

俺がハアハアしているとルイズがこっちに戻ってきた。言い争いが終わったらしい。

「ねえ。」

「何でしょうか。」

「あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから。」

やっべえ、更に興奮してきた。やっべえ。何かもう呪文だか何だかしらんが唱えてるけど、聞こえないほど興奮してる！！！！！！パンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパン

ツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパン  
ツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパン  
ツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパン  
ツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパン  
ツパンツパンツパンツパンツパンツぱんツぱんツぱん  
ぱんツぱんツぱんツぱんツぱんツぱんツぱんツぱん  
ウウウウウウ………

「……の者に祝福を与え、私の使い魔となせ。」

気付いたらキスしてた。柔らかい唇が俺の唇に当たるだけのキス。

ふう  
・  
・  
・  
○

何かすげえ冷静になってる気がする。これが賢者モードか……？

そういえば、手の痛みがこないな。時間が掛かるのか？

ルイズはツルベールに報告にいつている。あつ、また何か始まった。あの生徒、あとで殺しとかないと。

洪水とかゼロとか、  
聞こえてくる。何か  
どこでもよくなっ  
てきた。

そう呟いた、瞬間、俺の身体が妙に熱くなった。

「うお！？うおお！うおおおおお！つぐあ！お、俺の左腕が疼く！……！」

「すぐ終わるわよ。待ってなさいよ。使い魔のルーンが刻まれているだけよ。」

そうは言うけど！滅茶苦茶、熱いぞ！って、あ、収まったわ。

「ふう」  
・  
・  
・  
○  
」

右足を曲げて、左足を伸ばした、三角座りもどきをしていると、みんな大好きツルベール先生が、近寄ってきて、俺の左手の甲を確かめる。

「ふむ……。珍しいルーンだな。」

ガンダールヴですよ。先生。

「さてと、じゃあ皆教室に戻るぞ。」

先生がそう言うと、生徒の皆が宙に浮いた。やっぱり魔法ってすごいね。後で俺も試さないとな。

「ルイズ、お前は歩いてこいよ！」

あいつフライはおるか、レビテーションさえまともにできないんだぜ。」

「その平民、あんたの使い魔にお似合いよ！」

よし、あいつらも後で殺す。

気付くと、ルイズと俺だけが残されていた。

さて、どうしたものか。と思っているとルイズがこっちを向いて怒鳴った。

「あんた、なんなのよ！」

うおっ。ちよつとビックリした。

「なんなのって言われても……。それよりみんなのここに行かなくてもいいのか？」

「うるっさいわよ！平民のくせにあたしに指示しないでよ！」

カチンときた。そうだ、最初の方は俺はそんなにルイズが好きじゃなかった。

「わかった、わかった。わかったから。とりあえず、授業あんだろ？戻った方が良いぞ。」

「あたしに指示するなって言っただでしょ！」

うわぁ……。だんだん、めんどくさくなってきた。

「わかった。すまんかった。だから、もう、許してくれ。頼む。」

こいう時はとりあえず謝つときや何とかなるんだ。

「契約の方法が、キスなんて誰が決めたの？」

「知らん。ブリミル様だっけ？その人じゃねーの？」

「あたしのファーストキス返してよ！」

何て理不尽な怒り方だ、そう思いながら、俺は気絶した。

第一話、のようなもの。(後書き)

何かおかしいかも・・・(；^ ^)  
呼んでくれた方、ありがとございました。

## 第二話 のようなもの。(前書き)

やっと投稿出来たのは良いけども・・・まとまってないかも・・・。

## 第二話、のようなもの。

チュンチュンチュンチュンチュン・・・

小鳥の囀りで、俺は目覚めた。

しかし、何故だか体のあちこちが、痛い。

何故？理由は簡単だ。ここは、ルイズの部屋で、俺は床で寝ていたからだ。

今日中に、藁を取ってくるか・・・。

そう思いながら、立ち上がると、何かが、俺の体から落ちた。

「おい。今、何が起こった。俺には、パンツが落ちてきたように見えたぞ。」

一度、目を擦り、何かの落下地点を見た。そこには、ピンクの可愛いらしい、レース生地のパantsがあった。

俺は、それを音速を超えたんじゃないかと疑うほど、速く、手に取った。

そして、慌ててまわりを見回すと、そこにいるのは、可愛い寝顔をしているルイズと、冷や汗が止まらない俺の、二人だけだった。それだけを、確認すると、またパンツを見た。

今、俺はパンツを持っています。そのパンツの穿き主は、俺の目の前で眠っています。

クソッ。パンツを口に入れたくなる衝動に駆られる。

お、俺は一体、何を考えているんだ・・・！もつと、常識的に物事を考えるんだ。パ、パンツ・・・それも、俺のご主人様のパンツを、口に入れる・・・だと・・・。なんて、興奮するんだ。

やるしか・・・ない！

「はあはあはあ「んっ・・・。「！？」

俺の口の中まで、10cm。そこで、ルイズが寝返りをした。

ダメだ。やっぱり、やめよう。こんな事したって、何にもならないはずだ。



ところで、起こさなくて良いのかな？もう、朝だよ？よし、起こそう。

「ルイズ。ルイズルイズルイズ。起きようぜ。もう朝だぞ。」

ユサユサと、ルイズを揺らして、起きてもらおうとする。

それと同時に、ルイズから甘い香りが、漂ってくる。

ルイズを揺らす右手から汗が、滲み出てくる。

ここに来て良かった・・・。爺さん、ありがとう。

「うーん・・・。ほわぁあ。」

おっ。ルイズが起きた。呑気にあくびをしている。

「おはよう。ルイズ。」

「おはよう。・・・って、誰よあんた！」

おいおい・・・。どうやら、俺の御主人は、使い魔であるはずの俺を覚えていないようだ。

「折角、召喚した使い魔を忘れるなよ・・・。ルイズ、俺は拓人だ。昨日、召喚した、ルイズの使い魔だよ。」

俺は、軽く両手を上にあげて、やれやれ、といったポーズをとりながら言くと、ルイズはやつと思いついたのか、ハツとした表情をすると、また、元の表情にもどった。

「あー。そういえば召喚したわね。後、そのルイズって軽々しく言うのやめなさい。」

「わかりました。御主人様。」

わかりましたわかりましたわかりましたよ。

あー、何かこのやりとりめんどくせえな。・・・逃げるか。

「それでは、御主人様。私目は洗濯をしまいらすので・・・。ではっ。」

俺はそういうと、ルイズが着ているネグリジエを、やや強引にも脱がせ、逃げるようにして部屋を出た。

その間、ルイズが何かを言っていた気がするがこの際、気にしない。さあ、水汲み場はどこだ？

外に出て歩き回っていたら、マールライオンの顔だけバージョンがありました。わかりやすいですね。

「さて、洗うか。」

まず、ネグリジエを洗おう。

( ; ^ ^ )

「しまった……。石鹸が無い。」

やっちまった。やっちまったぜ。石鹸が無いよ。どうすればいいの。うーむ。あつ、そうだ。魔法で何とかなんだろう！

「そうと決まれば、早速……。」

そして、俺は、腰のベルトと挟んでおいた、杖をとった。

あつ、やっべえ。

「おい、呪文なんて知らないぞ。」

やっちまったよ。俺は、魔法の呪文なんて全く知らないぞ。

まあ、適当にやってたら、何とかなるだろう。

「まずは、練習からだよな。えーと、イメージが大切なんだっけ。」

てか、洗濯のイメージってなんだよ。あー、もう知るかよ。どうにでもなれ。

「ほいっとな。」

水汲み場に向けて、杖を振ってみると、何も起きなかった。

何だか、恥ずかしい気持ちになったので、杖を無言でしまった。

「俺、何やってんだろ……。」

もう、いやだ。帰りたい……。

「あの……。？どうかされましたか？」

絶望していると、後ろから声を掛けられた。

振り向いてみると、そこには、この世界に来て見かけなかった、

黒い髪の持ち主、シエスタだった。

「えっ？あ、その、御主人様に洗濯を命じられてね……。」

「あつ、もしかして、あなたが、噂の使い魔さんなんですか？」

「あ、はい。そうです。多分、その噂の使い魔だと思います。」

「そうなんですかあ。あつ、手伝いますっ。」

「あ、ありがとうございます。」

シエスタさんはいらない子だと思っててすみませんでした。何なの、この天使。

洗濯が終わったと思ったら、今度は干すのまで手伝ってくれたよ。感謝してもしきれないね。

「ありがとうございますシエスタ。助かったよ。」

「また何かあったら。声を掛けてくださいね。では。」

シエスタは、そう言い軽くお辞儀すると、どこかへ去って行った。ありがとうございますシエスタ。本当にありがとうございます。

「しかし、暇になった。どうしたものか。」

うーむと唸っていると、何だか寒くなってきた。

「うー、寒いな。あつ、そういえば、特殊能力をもらったらしいけど、どんな特殊能力なんだ。」

そーいえば、何の能力が使えるのか全く知らない事を思い出した。

「適当に念じたら何か起こるんじゃないか？ファイア！」

そう言つと、目の前が白く光った。すると、近くにあった木が灰になつて風と共に流れていった。

：（；ゝ。ゝ。ゝ。ゝ）：

「えっ？えっ、これ。えっ？どっ、えっ？これが特殊能力？えっ、最強すぎね？」

拓人は新しい能力、ファイアを覚えた！

「やつべえ。どうしよう。エルフだと思われたらどうしよう……。あつ、杖持ってたさっきのやれば良いんじゃないか！俺、天才じゃね？」

これしか使えないってわけじゃないだろ。今度試してみよう。被害  
の出ないところで……。

「あっ、そろそろ、洗濯物を取りにいかないと。」  
俺の冒険はまだ始まったばかりだ！

「何だったの？さっきの……。あんなのスクウェアクラスでも使  
えないはず……。彼は何者……。？」

拓人のいた広場の上空で、そう呟く声がした……。  
青い風が吹くと、もうそこには誰もいなかった……。。

## 第二話、のようなもの。（後書き）

オリジナルな展開しました。

感想とかよろしく願います。

### 第三話 のようなもの。(前書き)

色々突っ込みどころがあるかもしれませんが、いきなり決闘シーンです。

### 第三話、のようなもの。

「決闘だ！」

鼻血と怒りで顔を真っ赤にしたギーシュが、そう俺に叫んできた。  
やっちまった・・・。

外で遊んでいて授業に参加しなかったら、ルイズに朝食をを抜かれた。

何て理不尽なんだ、と思いつつ広場の近くにあった木の葉を食べてみると、それがまた美味しいので一口、二口、三口ともさもさ食べていたら、気分が悪くなったので、口から緑色の何かを盛大に木の根元にぶちまけているところをシエスタに見つかり、すごく心配された。

そして、そのまま厨房に連れていかれると、先程まで食べていた木の葉と比べ物にならないほどに美味しいシチューをもらった。嬉しくて泣いていると厨房のみんなに哀れみの視線を受けたかと思うと、マルトーさんに泣きながら抱かれた。

感謝の気持ちを込めてお辞儀をして帰ろうとすると、何かあったらここに来い、と言われ、お土産のクッキーまでもらった。

暇なので歩いていると、ギーシュ達が話しているのが見えたので眺めていると、ギーシュが壇を落としたのが見えたので、拾ってやるとケティとモンモンがやってきて順番に殴っていったので、俺も流れに乗って顔を殴ると、ギーシュが怒りだした。

そして今に至る。

(・^・)

やっちまった。本当にやっちまったわ。それ以外に思いつかないわ。

「あんだ、勝手に何やってんのよ！」

何故かルイズがやってきた。

「さあ？俺にもよくわからん。」

「ああゝ！もう！何でも良いからとつとギーシュに謝りなさいよ！」

「大丈夫だ。ギーシュぐらい片手でも勝てる自信がある。まあ温かい目で見てくれると助かるよ。」

それだけ言って、ギーシュの方まで歩いていった。

やっぱりルイズが何か言っていたが、無視してきた。

広場はすごく盛り上がっていた。

あちこちでどちらに賭けるだとか、色んな声が聞こえてくる。

「諸君！決闘だ！」

「ウォオオオオオッ!!!」

すごい盛り上がりようだ。

このままだと、俺が空気になってしまう……。よし、何か言うか。

「おい！」

シーン……。無駄に盛り上がった観客を黙らせる。

「よく聞け！俺は、かゝなり強い！ハンデとして、素手で闘つてやんよ！」

ふっ、決まった。って、あれ……？何故が無反応だ。悲しいのう。  
「う……。」

う・・・う、って何だよ！と突っ込みそうになると、周りの大気が揺れた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオッ！！！！！」」

ふつ、今度こそ決まっただな。

「き、貴様ア．．．。僕より目立ちやがつて！殺してやる！行け！  
ワルキューレ！」

ギーシュが突然、ワルキューレを突進させてきた。



「うおっと。」

しかし、特殊能力によって、動体視力を強化した俺にとっては、全てがスローモーションに見えるので、簡単に避けることが出来る。

「行け行け行けエー！ワルキューレエー！」

「よっ、はっ、ほっ。」

どんだん数を増やしてくるが、そんなの俺には関係無い。全てかわしきった。

「おのれ、ちょこまかと！」

避けるだけじゃ駄目だよな。よし。

「おい、もつとしっかりやってくれよ！」

「！？」

一気に距離を詰め、思いつ切り腹を蹴飛ばしてやった。

「ぐはあ！あ！ああああ！」

5M位飛んでいった。ギーシュが仰向けになったまま、咳き込んでいる。

そういえば、ワルキューレを忘れていた。

「ふんっ！」

ワルキューレを頭から縦にぶん殴った。

「あれ？青銅って案外、柔らかいんだな。」

一体のワルキューレが、殴っただけで半分位の大きさになった。

次に、三体まとめて腹を横から蹴った。

すると三体全てが半分に分かれた。

「ワルキューレは全て片付けたな。さてと。」

ギーシュのところまで歩いていった。

「おい、もう終わりか？」

「な、何を言う。ゲホッゲホッ！」

「おい、ここで負けを認めて、モンモランシーから手を引くか、ここで俺に殺されるか、どっちが良い？」

「ふ、巫山戯るなア！」

「ふっ、まあ良いや。そろそろ疲れたんでな。・・・俺の勝ちだ！」

「ゴフォツ！」

倒れているギーシュの腹を、思いつ切り踏んでやった。死んではないはずだ。多分。

「これにて、俺、澄川拓人、対、ギーシュ・ド・グラモンの決闘を終わる！俺は帰って寝る！」

何故か口を開けたままにしているルイズのところまで歩いていくと、ルイズはこちらを見ようともしない。

「おい、どうした？帰らないんだったら、先に帰っちゃうぞ？」

「あ、あんた……。あ、あんなに強いなんて聞いて無かったわよ！」

「えっ、だって聞かれなかったし……。」

「ああ！もう！いいわ！帰るわよ！」

「あいあいさー。」

ビシツと敬礼して言ってやった。

帰る際に、観客がずっと、黙ってこちらを見ていたので、軽く御辞儀をしてから帰った。

### 第三話 のようなもの。(後書き)

とつと拓人くん覚醒させたかったんだ。すまない。

#### 第四話、のようなもの。(前書き)

久々の投稿です。

## 第四話、のようなもの。

今日も元気な拓人くん。今日はいつたい何をしているのかな？

「ふ、ふふ・・・やったぜ・・・今日から俺は始まるんだ！」

俺はルイズパンツを白昼堂々天に掲げてそう叫んだ。

え？そんなことしてて大丈夫かって？

心配することはない。だって今は授業で誰もいな・・・。

(；。)

いたよ。いましたよ。シエスタが。

まるで性犯罪者を見るかのような目付きで俺を睨んでいた。  
ど、どどどどどうしよう。

そうだ、もう逆切れで済まそう！

「見世物じゃねえぞ！ゴルアアアアアアッ！！！」

「ひい！すいませんでした！」

シエスタはそう言い飛ぶようにしてどこかへ行ってしまった。

ごめん、シエスタ。こうするしかなかったんだ・・・。

「さて、これで誰もいなくなったな。」

そう呟き、手元のパンツを一瞥した。

すると何とも言えない虚無感が俺を襲った。

「俺マジでなにしてるんだろ・・・。」

orz こんな格好で落ち込んだ後にパンツを口に入れた。

「しよっぱいな。」

プツと吐き出してパンツを洗う作業に入る。

そこで豆電球が俺の頭の中で光ったような気がした。

「これは洗わなくて良くてね・・・？」

いや、それはダメだろ。俺の中の天使がそう言った。

おいおい、何言っただよ。まだたくさん洗わなきゃいけないパンツがここにあるんだ。一つぐらいバレないって。俺の中の悪魔がそう言った。

いやいやいや、ダメなものはダメだろ。俺の中の天使がそう言った。

「おい天使、ちょっと黙ってろ。俺もう決めたわ。もう覚悟決めたから。」

お、おう。やっぱり君は偉いな。こんな悪魔は放っておいて早く全部洗っちゃおうよ。俺の中の天使がそう言った。

「俺がなめたパンツをルイズが穿く、つまりそれは俺がルイズのアレを舐めているということであって・・・クンニ。これは間接クンニ・・・」

ちよ、ちよつと良いかい？き、君は一体何を言っているんだい？俺の中の天使がそう言った。

「ちよつとうるさいから消えてるよ。」

き、君は天使である僕を怒らせ・・・や、やめて。やめてください。死にたくない・・・。

拓人くんにまもっていたオーラが黒くなった気がした。

・・・・・・俺の中の悪魔は何も言えずにいた。

「さて、洗うか・・・。これ、以外な。」

少し湿っているそのパンツを頭から被り、しっかりパンツの匂いを満喫しながら残りのパンツを洗った。

乾かすのに時間が掛かりそうだったから自慢のチート能力で何とかしました。

部屋に戻ってクローゼットに畳んで入れ、替えの下着としてあのパンツを机の上に置いておいた。

ワクワクが止まらないZE

だがこれはパンツ魔神誕生のプロローグに過ぎ無かった・・・。

#### 第四話、のようなもの。（後書き）

パンツイベントきました。

パンツとチートが交差するとき、物語は始まる。



**第五話、のようなもの。（前書き）**

まったり更新。

感想とかよろしく。

返事できないかもだけど・・・。

## 第五話、のようなもの。

やあ、みんな。僕があ有名なあの人だ。

え？誰だよソイツって？

き、君はあの人を知らないのかい？

頭の良い君ならわかったと思うんだけどな……。

そうだよ……。僕が……。ともだ……

違うよ。僕はイーヴァルディだよ。

ごめん、嘘だよ。僕は……。何か飽きたわ。

え？結局誰かって？

みんな大好き拓人くんだよ。

とかやってたら今日という日がきました。

ところで僕はここに来てから何日たってんだ？

いつデルフを買いに行くんだよっていうね。

なんかかんやで一日が終わった……。的な描写が全く無いから曜  
日感覚が全く無いぞ。

ていうか、こういうのってメタ発言って言うのかな？よく知らない  
けど。

まあいいや。

ルイズの失敗魔法も見えてないし、こりゃパンツパンツ言っ  
てられないな。

そういえば何で僕はこんな馬小屋みたいな所で寝てるんだ。

もしかして使い魔の小屋かな。

使い魔としての仕事を洗濯しかしてないとかマジで何やって  
だろうな。

一回、授業でも見に行こうか……。

歩き回っていたら、教室と思わしき所があった。

ここかな、と思って窓から中を見ると、激しい爆発音と共に、僕の視界が白く染まった。

いてて……。どうやら今日が錬金の授業だったようだ。時系列おかしいな。もしかしたら錬金の授業じゃないのかもな。だってどんな魔法でも爆発するし。

そんなことより、思いつ切り木に頭をぶつけちゃった。

ついでに、今度は視界が真っ赤だ。

何だこれ、血か……？

拭こうと思い、手を額に当てると、痛っ、どうやら窓の破片が無数に刺さっているようだ。

「これは診てもらった方が良いかもしれんな。」

でもどうやって？

シエスタでも探すか……。あ、シエスタには前に酷い事をしてしまったんだった。

「やべえ……。何だか意識が朦朧としてきましたよ……。」

バタッ。文字通り木の根元に倒れてしまった。

はたしてどうなる

第五話、のようなもの。（後書き）

短いね。

しかも、出来れば続くようにしたくなかったんだけどね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1160s/>

---

残念な使い魔

2011年6月4日16時22分発行